

【報告】第2回 丸亀市文化財調査報告会 「丸亀城 -年輪年代調査・建築史的調査-

本講演会は、丸亀城天守の建築年代を考察する「年輪年代調査」と「建築史的調査」について、その調査内容や調査結果、調査にあたった先生方の考察を広く皆様へお知らせするために開催したものです。以下に、その概要をお知らせします。

○令和6年7月28日（日） 午後1時30分～午後4時30分

○場所：丸亀市市民交流活動センター「マルタス」

○演題：「丸亀城 -年輪年代調査・建築史的調査-

○講師：年輪年代調査 奈良文化財研究所名誉研究員 光谷 拓実 氏

建築史的調査 名古屋工業大学名誉教授 麓 和善 氏

○参加者：約70名

○講演1 「年輪から天守の年代を読む -年輪年代調査から-

講師 光谷 拓実 氏（奈良文化財研究所名誉研究員）

「年輪年代法」とは、木材の年輪幅の変動パターンを利用した測定法で、年代不明の木材の伐採年を割り出す手法です。近年では、デジタルカメラの普及により木材を切断することなく年代測定ができるようになり、木製の文化財建造物等の調査に広く活用されています。

先生は、丸亀城天守内の柱などに使用された木材を入念に確認し、本調査に適した木材総数23点（ヒノキ材：17点、ツガ材：6点）を選定のうえ、これらについて年輪年代法による年代測定を行いました。

その結果、正確に伐採年を求めることが可能な樹皮直下の最外年輪が残るヒノキの柱2本については、いずれも1641年に伐採された木材であるとのことのご報告がありました。

またその他にも、天守の1階から3階の床板（ゆかいた）が明治の終り頃に多数のツガ材やヒノキ材を用いて、張り替えられていたことをご報告いただきました。

○講演2 「丸亀城天守再考」

講師 麓 和善 氏（名古屋工業大学名誉教授）

「建築史的調査」とは、古文書や絵図はもちろんのこと、実際の建物の建築様式や柱・梁の木材組立方法をはじめ、木材に残る加工跡から使用されている大工道具などを総合的に調査し、その時代背景を考察し、建物の建築年代を導くものです。

今回の調査では、まず丸亀城天守の建設年代に関する従来の説を整理したうえで、上記の調査研究を行い、特に1階と2階に使用されている古い柱材の全てに鉾（ちょうな）という昔の道具を使用し、表面を研（はつ）って仕上げた加工跡を確認されました。その中には、年輪年代法により1641年に伐採されたものと報告のあった柱材

2本も含まれており、これら全ての柱材が同時期（1641年頃）に伐採、加工、組立が行われていたと考えられるとのご報告がありました。

また、天守3階の柱部材については、全てに台鉋（だいかんな）という道具が使用され、表面が丁寧仕上げられており、この様に最上階を丁寧に仕上げ、書院造の御殿風とするのは姫路城大天守や名古屋城大天守をはじめ、当時のほとんどの天守で見られる常套的手法であるとのことでした。一方、1664年から1665年に建てられた宇和島城天守は、丸亀城天守と同様の建築様式（3重3階の層塔型（そうとうがた））ですが、最上階だけでなく、1階から3階までの柱の全てにおいてこの鉋（かんな）仕上げが施されており、ここに明らかな時代の違いがあるとのことでした。さらに、層塔型という建築様式は、1638年に再建された江戸城天守と同様であることから丸亀城天守が、寛永末の1643年に完成したとしても全く問題ないとの見解が示されました。

一方、昭和の解体修理工事中に3階の壁の中から発見された万治3年（1660）3月の年紀のある板札については、松江城天守の建設当初の祈祷札が、一般的な棟札のように釘で打ち付けられていたことに対して、丸亀城の板札は厚さがわずかに6mmと薄く、壁に埋め込むことを前提としていたことなど、その取扱いが全く異なることから、1660年は、丸亀城天守の創建年代を表しているのではなく、1658年に新しく藩主となった京極高和が天守の修理を行ったものと考えられるべきとのことでした。

これまで丸亀城天守の建築年代は、絵図や文献、さらには板札に明記されていた1660年の年号から1643年～1660年の間とされてきましたが、今回の調査で丸亀城天守の建築は1641年に伐採した木材を使用し、建築史的調査から1643年には完成されていたとの新たな見解が示され、山崎時代の天守の建築年代をより明らかにするご報告をいただきました。これは、丸亀城の歴史を紐解く上で非常に貴重な調査成果となり、当日お越しいただいた参加者の皆様も興味深く先生方の講演に耳を傾けていました。

先生方には、遠方から長期間にわたり調査にあたっていただき、今回はその成果をご報告くださりまして本当にありがとうございました。